

車花子 (チャ ファジャ)

## 博士論文内容要旨

芥川龍之介 (1891~1927) は日本近代文学 (大正文壇) の代表的な作家の一人であり、中国文学関係との研究において重要な位置を占めている。彼の三十六年という余りにも短い人生の中で、文学者としての生涯はほとんどその半分ぐらいの十何年間に過ぎなかったが、独自の作風、技巧的な文体により、数多くの名編を次々この世に残した。その中の中国関連の文学作品は、中国の古典から題材を求め、それを近代的に解釈し再構成する中で人間の心理を表出した「仙人」「杜子春」「酒虫」「英雄の器」「秋山図」等があるが。筆者は、本論では芥川の中国関連作品の中で主に初めて中国人女性の美に触れた「女体」と作家の一九二一年の中国訪問前後の近現代中国関連作品「南京の基督」「奇怪な再会」『支那遊記』「湖南の扇」等の中国人女性の表象の変化に注目した。訪中前の芥川は「芸術至上主義者」と呼ばれ、訪中前の中国関連作品は読書の印象と同時代と一緒に生きていた谷崎潤一郎、佐藤春夫等の作家たちの見聞と作品の影響を受けた、ロマンティシズム・異国趣味を多分に持っていた作品であった。芥川は、中国訪問前の「南京の基督」では買春観光を楽しむ日本人男性に性を提供する敬虔なキリスト教信者の私娼を、「奇怪な再会」では、日清戦争後、日本帝国軍人によって日本に連れられてきて妾の暮らしを過ごしているがもともとは威海衛で娼婦として働いた中国人女性を描いている。この二作とも中国人の娼婦がヒロインとして設定され、その娼婦の身体を享受する日本人男性が登場する。言わば日本人男性に性を提供する中国人の娼婦という仕組みになっている。芥川のこのような訪中前の中国現代物の小説の描き方は、当時の新聞・雑誌をはじめとするメディアの広告までに含まれている言説の影響と、芥川の周辺人物、特に谷崎潤一郎、佐藤春夫等の中国旅行及びその見聞をもとに創作した作品が与えた影響を看過できない。

筆者は、作家の実生活とキリスト教との関係及び創作技法から、作品に描いているのは、当時としてはまだ訪れたことがない中国の事情ではなく、作家の実生活上の体験が物語として反映された作品であると論じた。芥川は中国を舞台に、中国人娼婦をヒロインにした「南京の基督」で、生計を立てるために体を売るしかない娼婦の境遇を通して創作の行き詰まりを感じながらも売文行為を続けざるを得ない作家の苦しい心情を表すとともに「無頼な混血児」が娼婦を騙しとり、娼婦の梅毒に移され発狂してしまう結末から、作家が個人的に恐れていた遺伝からの発狂という恐怖から逃げようとする心情を表した心境小説的読みが出来る作品だと論じた。「奇怪な再会」は発表当時から注目されずたとえ評されたとしてもそのあまりにも近代的な知性や合理性が勝った文章やスタイルによって、「奇怪な」物語を描きながらも「奇怪さ」を十分に表現しきれていないとして、現在に至るまで低い評価が与えられてきた作品である。筆者は「奇怪な再会」を「怪異」趣味だけ

ではなく、実母の発狂を念頭におき、純粹で無垢な女が美しく発狂していく物語——芥川の「私小説」的な要素を備えた作品という観点から考察した。

芥川は一九二一年三月下旬から七月上旬にかけて大阪毎日新聞社の海外特派員として上海、南京、九江、漢口、北京、大同、天津等中国各地を訪れて、その見聞を単行本『支那遊記』に綴っているが、現地の日本人と中国人の案内で中国の各地を歩き回りながら、中国人女性特に中国人の芸者たちを綿密に観察している。

本論では、当時の新聞・雑誌をはじめとするメディアの言説と芥川の周辺にいた作家たちによって表象された当時の中国と中国人女性への歪曲されたイメージを、芥川が中国訪問とその結晶の『支那遊記』にてどのように払拭しているかを考察する。

芥川は、芸術の技量を惜しみなく発揮する老芸者に感動し、また自作の面影がある芸者が控室では「菜ばかり」の食事をする慎ましい姿に「美人以上の何ものか」を発見する。帰国後、発表した「湖南の扇」に登場する芸者は、訪中前の日本人男性に体を売る娼婦から「負けぬ気が強い」中国の底力を秘めた女性に表象される。この娼婦から芸者へと見逃してしまいがちな変化にこそ芥川の中国訪問に寄せた何らかの意味があるのではないか。

芥川は中国と中国人を描く上記の作品でなぜ女性に、それも社会の下層階級に属する立場の弱い娼婦や芸者に焦点を当てていたのか。

芥川は、一九二二年四月に発表した随筆「澄江堂雑記」の「告白」という文章で「有りのまま書く」自然主義作法に反対した。また、一九二三年六月執筆した「澄江堂雑記」に、あるテーマを生かすためには「異常な事件」が必要であり、その異常な事件を「今日この日本に起こった事」としては書きこなしにくいと語っていた。芥川は、作中で舞台を中国に、中国人女性をヒロインに設定しているがヒロインに託して自身の処せられた境遇と気持ちを「陰約の間」表している。

本論では、芥川の中国関連作品の執筆時の背景を覗わせる感想や随想及び日記や書簡や手記などを作品と関連して読み、作者の創作当時の心境を把握した。また芥川とほぼ同時代を生きてきた谷崎潤一郎や佐藤春夫ら芥川周辺の作家たちの日常生活、中国旅行、「中国もの」の創作と芥川の「支那趣味」文学との特徴を究明した。

芥川の一九二一年の中国訪問体験が作家にどのような影響を与え、それによって芥川の中国関連作品の中国人女性表象がどのように変わったかを考察した。そのためには、「南京の基督」「奇怪な再会」「湖南の扇」などの小説作品だけではなく、『支那遊記』をはじめとする芥川が残した多くの文章や書簡などを含めて詳細な検討を行った。また、一九二一年前後の中国と日本の関係をめぐる関係や、当時の文化・世相・時代背景といったことを総合的に考察したつもりである。

芥川は中国訪問から五年たって紀行体小説「湖南の扇」(『中央公論』一九二六年一月)を発表する。この芥川最後の中国現代物「湖南の扇」には、仕事で長沙を訪れた日本人男性と、中国人の芸者が何人か登場する。この芥川の訪中前後の中国現代物の登場人物たちの設定において、娼婦から芸者へと見逃してしまいがちな変化にこそ芥川の中国訪問に寄

せた何らかの意味があるのではないか。

芥川龍之介は中国訪問から三年後、「長江游記」（『女性』一九二四年九月）を発表するがその紀行文の前置きに、当時病身でハードなスケジュールに追われながら決行した決して愉快なだけではなかった中国旅行を振り返り懐古の心情を表している。また「長江游記」の発表から一年三カ月後、「湖南の扇」（『中央公論』一九二六年一月）という紀行体の小説を発表した。これは芥川の生前最後の短編集『湖南の扇』（文芸春秋社出版部、一九二七年六月）の表紙を飾った芥川自負の作品でもある。芥川はこの晩年の中国現代物「湖南の扇」でいったい何を表そうとしたのか。芥川は一九二一年五月三十日に漢口から汽車で長沙に向かい、六月一日には漢口に戻っている。芥川の足取りを辿ってみると長沙では妓館を訪れていない。しかし「長江游記」には済良所（中華民国時代の娼妓救済所）という自由廃業の女を保護する所を見学したことが記載されている。芥川の妓館での体験は上海の小有天という酒楼（妓館）への訪問でありその体験を「上海游記」に詳しく綴っている。それでは、芥川の上海での妓館の体験がなぜ「湖南の扇」では舞台が長沙に設定され、上海の妓館で観た芸者達が長沙の妓館に登場しているのか。それは芥川の湖南省での見聞があまりにも印象的だったので作品の舞台をわざわざ長沙に設定したからである。

「湖南の扇」では芥川と思しき日本人旅行者の「僕」——「（長沙には）豚の外には見るものがない」と中国を見下す人物——と中国のエリート階級の代弁者でもある譚永年との応酬、また植民者に象徴される「僕」が、半封建半植民地化された中国でこの三人の芸者をそれぞれどのような視座で観ているのか。また、芥川と思しき人物「僕」の言動にどれほど芥川の心情が語られているのかを考察する。芥川はこの三人の芸者の表象を通していったい何を表そうとしていたか。その理由は何であったかを検討し、最後に「湖南の扇」は晩年の芥川が中国訪問前後の中国現代物——「南京の基督」「奇怪な再会」「支那游記」等を再構築した作品だと結論をつけたい。「湖南の扇」の執筆時期、芥川は心身とも疲労困憊の状態であったが、中国現代物の遺作「湖南の扇」の創作においてそのような心情を直接的には表せず、「僕」に託して、確かに「陰約の間に」自分自身を語っていた。

「湖南の扇」では、芥川の中国旅行の各種の情報が提示され、また『支那游記』の広範な作品世界が圧縮して繰り広げられている。本作では、含芳、玉蘭、林大嬌が詳しく描かれている。この三人の芸者は、それぞれ芥川の訪中前の中国現代物の「南京の基督」「奇怪な再会」のヒロインと芥川が実際に中国で観た上辺だけ近代的になっている「カブレ」た「新時代の女性」の面影がある人物として造形されている。

芥川の「芸術その他」（『新潮』1919年11月）をはじめとする前期の一連の文学理論と晩年の「文芸的な、余りに文芸的な」「続文芸的な、余りに文芸的な」（1927年4月～8月）に現れる文学理論にはズレがあり、それは訪中前の「南京の基督」「奇怪な再会」と訪中後の『支那游記』『湖南の扇』の中国人女性の表象及び作風の変化にも反映されていると思う。

従来の芥川研究では、作家個人の伝記的事実に還元し、年代ごとに変化する作家の関

心、思想、感性などとの作品論を試みるが多かったが、筆者は芥川の伝記的事実を適宜参考し、さまざまなコードや情報を援用する研究方法を導入し、作品のテキストを同時代の政治的、社会的、文化的コンテキストなどの相関関係を読み、中国と日本の国際関係の文脈に、芥川がどのようにコミットメントしているかに注目した。